哀愁の左江内氏

理学部 2 回生　清水優

今年の初めにドラマ化された左江内氏（さえないし）。ドラマのポップな感じも良かったですが、原作に漂うサラリーマンの哀愁も感じてほしかったので、今回はこの作品をお勧めとしてチョイスしました。

『割りこみ許すまじ』あらすじ

会社勤めの傍らスーパーマン業をこなす左江内氏ですが、我慢ならん事もあります。会社は実力が認められるべき場所である。自分より実力のある若いやつが先に出世するのは当然のことである。模範的ともいえる考え方の左江内。その強い信念の裏返しとして、“抜け駆けする奴は絶対に許せない”という意思も強いのです。思うように仕事ができずにイライラしているさなか、スーパーマンとして呼び出された先にはバスの割り込み客が。まさに“抜け駆け”をしようとした男に対し、左江内の怒りは爆発。スーパーマンの怪力に任せてその男を痛めつけます。ボロボロになった男が震えながら一万円札を出して、命からがら逃げていく。その時左江内は自分が確かに暴力の快感に酔っていたことに気づき、戦慄する…。（話はもうちょっと続きます）

おすすめ！

話の性質上あまり小さな子にはお勧めできませんが…。責任とかストレスが充満している現代社会、我慢して我慢して自分の思う道を突き進むのがいわゆる王道なのですが、抜け駆けをして、つまり責任とかいうものを無視して卑怯な手を使って自分を押し上げようとする輩もいます。そういうやつは痛い目を見る、とは言うものの痛い目を見ない場合もある。そいつは何なのか。抜け駆けした結果幸せになっているじゃないか。許せないが、それが事実。そしてそれは自分の近辺にも起こりうることなのです。

これは紹介記事なのであまり話の核心には触れたくないのですが、この回の最後、抜け駆けに対して Yes でも No でもない解答を残しているように思えます。そこに何とも言えぬ哀愁を感じたのでお勧めさせていただいた次第です。

左江内氏を読んだことのある方は比較的少ないと思います。ただ、生活に根差した題材、コマから感じられる情緒、1 巻完結という小品感など、様々な要素が絡んで醸し出される一種芸術品的な魅力は、唯一無二の物であると思います。一度じっくりと腰を据えて一冊を味わうことをお勧めします。駄文失礼しました。